施肥基準利用上の留意事項

この施肥基準を参照される場合、下記のことに留意して適切な肥培管理の指導をされるようにお願いいたします。

① 前回の改訂から今日までに間に作型・栽培品種等が変化し、施肥基準量と実際の施肥量との間には大きな違いがみられるようになった。また、環境問題等の様々な要因も考慮の対象となってきた。このような情勢の変化に対するため、施肥基準を見直すこととなった。

② 土壌の種類を黒ボク土、灰色低地土（沖積土）・褐色森林土（多摩重粘土）の２つに大別して表記した。

③ 黒ボク土の場合、CEC が 30～40meq/100g 前後のものを想定して作成している。このため CEC が 20meq/100g 以下の場合１回の施肥量を減らし、施肥回数を増やす（少しずつ何回にも分けて入れる）ことが必要である。

④ 施肥前土壌または前作跡地土壌の当該成分が診断基準以下を前提として、施肥量を変化させる。つまり、

a、前作の肥料成分が診断基準以上の場合は・・・減肥する。

b、前作の肥料成分が少ない場合は・・・多少増加する。

⑤ 基準収量が変化するものは、表記の基準収量との比較によって施肥量も変化させる。例えばコマツナの場合 1,500kg として、施肥量を決めているため、1,000 kgの場合は 10～20％減らし、2,500 kgの場合は 5～10％増する等の処置をする。

⑥ たい肥の施用量は牛フン堆肥を基準としている。このため、

a、牛フン堆肥 2,000 kg/10a を基準としている作物に、1,000 kg/10a 施用する場合、化学肥料を多少多め（数％）にする。

b、豚プン堆肥 1,000 kg/10a の場合は、牛フン堆肥 2,000 kg/10a とほぼ同じ化学肥料を施用する。

c、落葉堆肥、ワラ堆肥で家畜糞尿のほとんど入っていないものは、3,000kg/10a くらいまでは施用できる。肥料成分の少ない場合（N 2％、P_2O_5 １～1.5％、K_2O 2％くらいの堆肥・水分 50％換算）は多少多めにしてもよい。

⑦ ケイフンは 500 kg/10a までを限界とする。施用したときは、肥料を減肥すること。

⑧ 赤土を客土や盛土したときは、はじめに pH 矯正と、リン酸資材や植物質堆肥を十分に施用する。

花き施肥基準利用上の留意事項

（１）施肥基準の数値は次のように表示した。

鉢物　　元肥：用土１００ℓ当たりの施用グラム数量

　　追肥：１００鉢当たりの施用グラム数量

その他　１０アール当たりの施用キログラム数量

（２）鉢物の施肥基準は、次の用土を標準用土として想定した。

育苗土（移植土、鉢上土、鉢替土）

赤土　　４０％

腐葉土　　４０％

堆肥　　１０％

ピートモス　１０％

定植土

赤土　　５０％

腐葉土　　３０％

堆肥　　１０％

ピートモス　１０％

（３）元肥として緩効性肥料を主に使用する場合は、生育状況を見て、追肥をひかえめにする。

（４）鉢物の追肥については、１００鉢当たりの施用グラム数量が表示してあるので、鉢の大きさが表示してあるものと異なる場合は、次の鉢容量を参考に換算する。

鉢の号数と容量

鉢号数	3	3.5	4	4.5	5	5.5	6
容量(mℓ)	200	350	550	800	1200	1900	2300